群教セ	F08 - 01
	平18.232集

肯定的な支援を取り入れた信頼関係を高める授業改善の工夫

長期研修員Ⅱ　　須永　久美子

《研究の概要》

本研究は、算数科の時間に教師による児童への肯定的な心理的支援を行う授業改善を図り、学級の教師と児童、児童相互の信頼関係を高めることを目指したものである。具体的には、児童の実態に合わせカウンセリングの技法による心理的支援を行った。児童は、振り返りカードの感情曲線に感情を記入し、自他のよさやがんばりを記述した。その結果、児童は、教師や友達から認められて自己肯定感を高め、信頼関係をつくることができた。

Ⅰ　人間関係についての現状と必要性

1　人間関係の低下と現状

ここ数年来、不登校・いじめ・学級崩壊・キレやすいなど、人間関係を起因とする児童生徒の問題行動は、どの学校でも見られる。本人も教師も早期解決を願っているが、思うようにいかずに悩んでいるのが現状である。

これらの問題行動は、「人間関係の希薄化」や「社会性の欠如」が背景や要因として指摘されている。その理由として、都市化や少子化・核家族化により、家庭や地域で、同年齢や異年齢で遊ぶ機会や場所が少なくなり、今まで自然と身に付いてきた対人関係を学ぶ機会が減ってきたことが挙げられている。

2　授業に人間関係づくりを取り入れるとは

人間関係づくりは、学校生活のあらゆる場で行われている。その中心となる学級は、学校生活の大半を過ごす場所であり、一緒に授業を受ける集団でもある。それだけに、学級内の教師と児童生徒、児童生徒相互の人間関係の善し悪しは、一人一人の児童生徒にとって大きな意味をもつと言える。つまり、学級を信頼関係のある、楽しく安心して過ごせる場所にしていくことは重要なことである。そのためには、一人一人の自己肯定感を高め、学級の一員であるという所属感がもてるようにしていく必要がある。

実際には、心理学的な援助による実践を取り入れて人間関係づくりをしている学校も少なくない。具体的な援助として、一つ目は、全員を対象に学級活動や道徳の時間を使って、構成的グループ・エンカウンターやソーシャル・スキル・トレーニングを行う指導（開発的な生徒指導）、二つ目は、問題行動が見られたときなどに、一部の児童生徒を対象にした個に応じた指導（予防的な生徒指導）、三つ目は、長期欠席などの長期化深刻化した児童生徒への重点的な指導（治療的な生徒指導）である。これらの先行研究事例は、大きな成果を見せて多数報告されている。

Ⅱ　研究の方向性

1　自己肯定感とは

自己肯定感とは、自尊感情や自己効力感・自己有能感ともほぼ同じ意味である。自己肯定感は、自分に自信がある、自分の短所も含めた自分が好きであるという感情である。

日々の学習指導の中で、教師は「○年生だからこれくらいはできて当然だ」という思いにとらわれたり、児童生徒を学級内の相対評価で評価したりすることも少なくない。また、個々のがんばりやよさに気付いてもそれを十分に伝えていないことや、児童の短所ばかりの注意や叱責に偏ることもある。その結果、教師ばかりでなく親や友達からも肯定的な評価を与えられる機会が少ない。そのために、自分のがんばりやよさに気付かずに、否定的な評価ばかり与えられて自己肯定感が低くなっている場合もある。つまり、自己肯定感を高めるためには、他者からほめられる（認められる）ことが必要なのである。

置籍校の教師に、「授業中にほめる（認める）」

ことについてアンケート（授業中の支援について記述式と４検法で回答、７月実施）を行った結果、次のような回答も得られた。

・ほめるのがいいと分かっていても、つい叱ってしまう
・ほめるのが苦手だ
・ほめてもあまり変わらないのでは・・

現実問題として、ほめる（認める）ことを日々心がけていても、難しいと感じている教師もいることが分かった。

2　自己肯定感を高めれば信頼関係はつくられる

図１　研究構想図

一人一人の自己肯定感を高めるには、まず教師が児童生徒のよさやがんばりに気付き、それを認め伝えることである。児童生徒は、教師に認められたことで自分のよさに気付き自信(自己肯定感)をもつ。そして、教師に対しても信頼感をもつ。それは今までの自分の否定的な見方を変えることにもつながる。

一方、児童生徒の気持ちや行動が前向きに変化することは、教師自身の自己肯定感や自己有用感を高めることになり、児童生徒と教師間相互に信頼関係をつくることができる。

さらに、児童生徒は自分が認められる心地よさを体験したことで、今度はほかの児童生徒に、自分の気付いたよさやがんばりを伝える。そして、一緒に喜びや楽しさの感動を共有し、お互いに協力し支え合うことができる。また、間違いや失敗したときには、励まされ非難や無視をされないことから、安心感をもつことができる。

このような人間関係の中では、児童生徒の自己肯定感は高まり、自己理解・他者理解がすすめられ、その結果、信頼関係のある学級がつくられると考えた。（図１）

3　心理的支援とは

学校心理学では、学習における人間関係づくりや学習意欲の向上のために、教師のサポートを４つに分類している。その中から情緒的サポートと評価的サポート（表１）を学習に取り入れる。

表1　学校心理学における教師のサポート

ｻﾎﾟｰﾄ	提供する内容と具体例
情緒的	子どもを安心させ勇気づける情緒的働きかけ ・共感的な声かけ「だいじょうぶだよ」「どうしたの」 ・傾聴、承認「がんばったね」「ありがとう」
評価的	学習者の学習という行動について、教師側からフィードバックを提供する 「君の発表は分かりやすいね」「すばらしい考えだね」※留意点、子どもの行動に対して行い、人格については評価しない

4　心理的支援に使うカウンセリングの技法

情緒的サポートや評価的サポートを効果的に行うために、カウンセリングの技法を使う。学習中に使用するカウンセリングは、表２のように児童生徒と接するときの態度などを含むもので、基本的には、言語的な技法と非言語的な技法がある。相手に伝わるメッセージは言語が25%、非言語が75%であり、非言語こそ大事にしていく必要がある。

表2　カウンセリングの技法

言語的な技法	非言語的な技法
・受容 ・繰り返し ・明確化 ・支持 ・質問	・アイコンタクト ・表情 ・ジェスチャー ・声の音量 ・言葉づかい

5　算数科における自己肯定感と心理的支援

算数科の学習における自己肯定感は、学習内容の理解度に大きく左右される傾向がある。そこで、理解度や授業態度などの個々の実態に合わせて支援する。日常の児童の観察や、実態調査などのアンケートや算数科テストなどから情報を集め、児

童を多面的に見ることが必要である。そして、児童一人一人に合った肯定的な心理的支援を取り入れる。

(1)　算数ができる、自信をもっている児童

自信を持続し、さらに向上できるような支援。気付いていないよさに新たに気付かせる支援。

(2)　算数が苦手で自信のない児童

できない、分からない、恥ずかしいというとまどいや不安な気持ちを受容・共感し、できないことではなく、できるようになったことを認め、自分の成長に気付かせる支援。

○学習内容を理解できたかどうかだけでなく、そこに至るまでの自分の伸びを認め伝えていく。

○解法の仕方を共に考え、できる限り自分で解決できるように支援する。粘り強く取り組めたことを伝え、正解が得られた喜びを共感していく。

○計画的に個別支援の場や活躍の場を設ける。

(3)　認められていないと思っている児童

活躍の場面をつくり、よさを伝える支援。

6　ほめることの意味

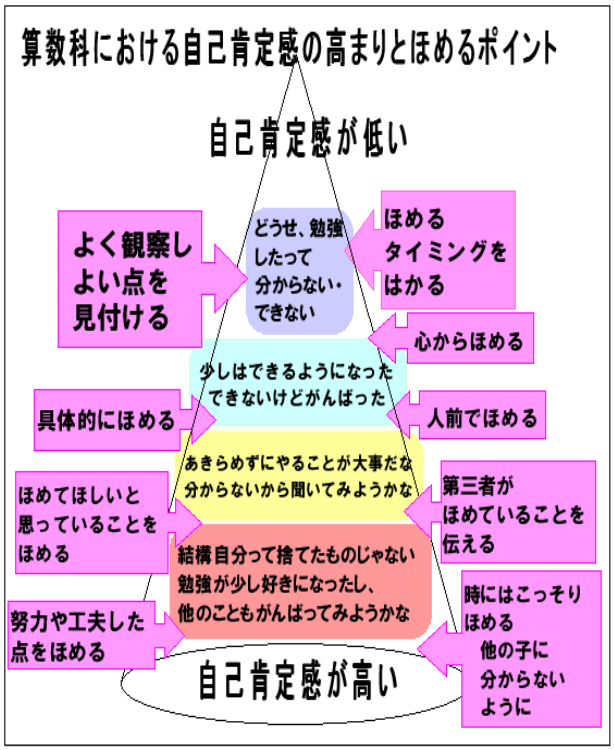


図２　自己肯定感の高まりとほめるポイント

期待されると伸びることを「ピグマリオン効果」と呼ぶ。具体的な賞賛は、自己肯定感を高めることになると考える。上手にほめるポイントは図２のとおりである。しかし、ほめてばかりいればよいのではなく、ほかの人への迷惑になる行為や学習規律を乱すことについては、注意もしていく。

Ⅲ　実際の授業例

1　単元について

○単元名：三角形のなかまを調べよう（４年）

○単元の目標：二等辺三角形、正三角形の概念や性質を理解し、それらを構成したり用いたりする能力を伸ばす。

○単元指導計画（８時間予定）（資料編参照）

時間	ね　ら　い
1	辺の長さに着目して三角形を弁別することができると共に、二等辺三角形と正三角形の定義を知り、これらを弁別することができる。
2	コンパスを使って二等辺三角形をかく方法を考え、いろいろな二等辺三角形をかくことができる。
3	二等辺三角形のかき方から、正三角形をかく方法を考え、コンパスを使っていろいろな正三角形をかくことができる。
4	角の大きさを知り、角の大小を比べることができる。
5	二等辺三角形と正三角形の角の性質を理解する。
6・7	自分の興味で選んだ作業的な活動に進んで取り組むことを通して、図形のもつ美しさに関心をもち、図形の感覚を豊かにすることができる。（ジオボード・しきつめ・箱づくり・折り紙の中から選択）
8	既習事項のまとめをする。

2　支援計画について

一人一人に合った支援を行うために、既習事項の確認テスト、学級集団をアセスメントする『たのしい学校生活を送るためのアンケート「Ｑ－Ｕ」』（以下Ｑ－Ｕと記述）と算数科意識調査を実施した。担任による日常観察と合わせて、単元全体と各時間ごとの支援計画を立てて授業を行った。

○単元全体での支援例

担任とのかかわりを増やす。作図が苦手なので、作図では個別支援が必要。級友から無視されているので、活躍の場を作る。

○本時の支援例

事前のテストでコンパスの扱いができなかったので、「針が動かないようにしっかり刺して、くるくる回すようにしてごらん。」と具体的な言葉かけをする。（指導案は、資料編参照）

3　自己評価（振り返りカード）について

自己評価として、振り返りカード（図３）の記入を毎時間行う。グラフの横軸は授業時間、縦軸は10点満点で感情を表す。時間の経過と共にどんな感情をもったかを曲線で表し、曲線の高い理由、低い理由を書く。最後に、下の欄に自分や友達のよさやがんばりを書く。振り返りカードの内容は、本時のまとめや次時の導入の場面で紹介する。教師は児童の感情を肯定的に受け止め、気付いたよさを加えたコメントを書いて児童に返す。また次時の支援に生かすようにする。

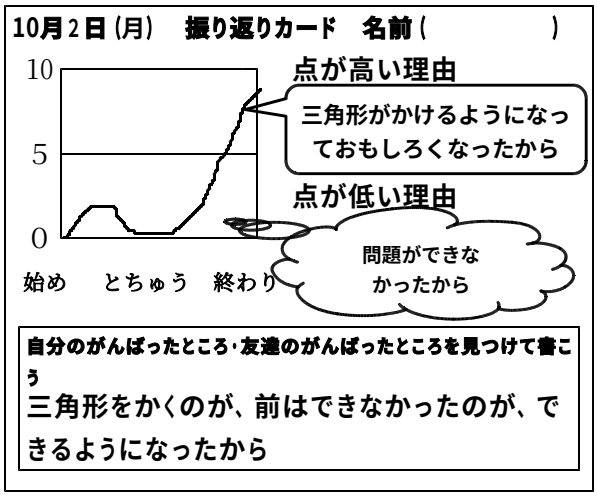


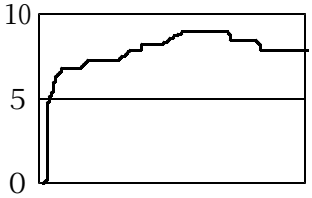
図3　振り返りカードの例

3　肯定的な支援例

(1)　算数に自信をもっている児童への支援

○事例１・・・まとめの場面での支援

発表も多く算数が得意な児童であるが、学習の最初は、今日の学習で何をするのか見通しをもてなかったため低くなっている。三角形づくりでは、夢中に取り組む。三角形の仲間分けでは、事例２の「向きを変えると・・」と意欲的に発表する。教師から「そうだね。（受容）いいところに気付いたね。」（評価的サポート以下、評価と記述）と認められる。ほかの児童からも「発表できてすごい。」と振り返りカードに賞賛される。

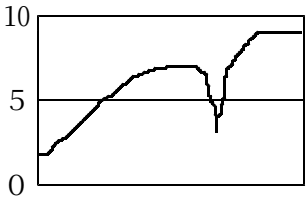


＜支援のポイント＞
・教師や友達から受容され認められること
・授業の始めに、本時の学習内容を知らせ学習への不安を早めに解消すること

(2)　算数にあまり自信のない児童への支援

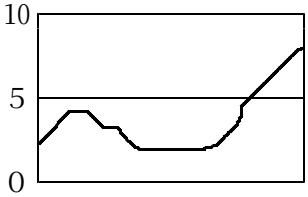
○事例２・・・集団解決での支援

三角形の仲間分けで、辺の長さではなく、「縦長の三角形」「つぶれた三角形」と形で仲間分けしたグループがあった。「三角形の中には、向きを変える（90度回転する）と、平べったい三角形の仲間に入るものがある」という意見が出された。この分け方では、どちらに入れていいか迷うので、この仲間分けは分かりづらいことになった。このグループの児童は、「分かりづらい」と言われ、否定された気持ちになる。教師の「縦長やつぶれた三角形という分け方では、分けづらいことが分かった。けれど、このグループのおかげで、辺の長さの分け方がよいことに気付くことができた。このグループのおかげで勉強になったね。」（評価）という言葉に勇気づけられ、その後、意欲をもち学習することができた。



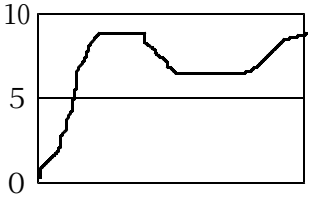
○事例３・・・まとめの場面での支援

前半は、三角形づくりが楽しくて意欲的に取り組むが、グループの話合いで、意見がまとまらず、意欲が下がる。後半の練習問題では、多くの児童が、不等辺三角形を二等辺三角形と誤答した。教師の「間違った子が多い中で、全問正解はすごいね。」（評価）という言葉や、ほかの児童からの「すごいね。」という言葉に自信をもつ。



○事例４・・・自力解決での支援

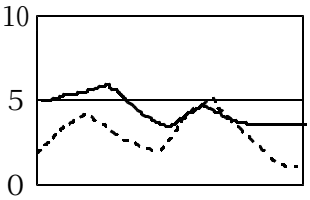
授業の最初の復習の場面で、挙手をして発表する。しかし、グループの話合いの時に、ほかの３人の児童が辺の長さに着目して仲間分けする意見を言う。色で分ける考え方が受け入れられなかったので自信を失う。教師の「だいじょうぶだよ。」（情緒的サポート以下、情緒と記述）や、「（練習問題への取組に）がんばってるね。」（情緒）という言葉かけで最後までやり遂げる。



＜発言や意見が否定されたときのポイント＞
・否定されたことへの恥ずかしい気持ちを受容し、安心感を与えること
・間違いを学習に生かすための支援

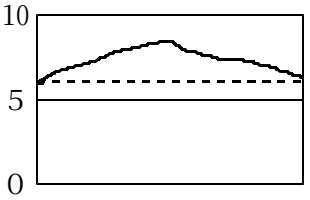
○事例５・・・自力解決での支援

三角形を正確に作図できるが、できるのは当たり前と思っていて算数に自信のない児童である。教師が(丸を付けながら)「１回で正確にかけるのはすごいよ。１回で正確にかけることに自信をもっていいよ。(評価)」という言葉かけを作図のたびに繰り返した。この後、少しずつ自信をもつようになってくる。前時は点線、本時は実線。



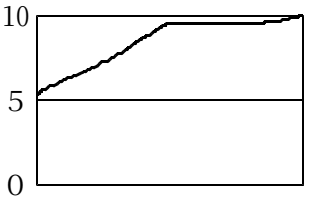
○事例６・・・自力解決での支援

前時の二等辺三角形では、何回も書き直しをしていたので、点線のような感情曲線になった。本時（実線）では、かき直しはなく正確にかけるようになる。



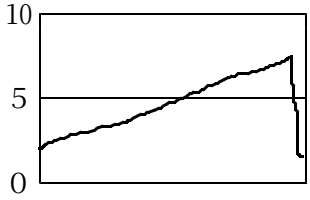
Ｔ：(丸を付けながら）前の時間では、何回も苦労してかいていたけど、今日は１回で正確にかけるようになったね。(評価)
Ｃ：(うれしそうにうなずく)
Ｔ：上手になったんだね。(評価）よかったね。でも、みんながもう終わってどんどん正三角形をかいているのに、ぜんぜん進んでないのはどうしたのかな。
Ｃ：コンパスを忘れたので、友達が終わってから借りているんです。前、違うクラスの友達に貸したのを返してもらっていないんです。
Ｔ：友達のを使っているんで遅くなったんだ。待っている時間が長いから遅くなって、いやな気持ちでしょう。(共感、情緒)・・・次の算数の時間はどうしたらいいかな。(自分に考えさせ自己決定を促す)
Ｃ：(コンパスを）もう一度探してみます。

翌日の朝、登校後すぐ「今日は、(コンパスを）忘れずに持って来ました。」と自分から言いに来る。毎日のように忘れ物をしていたので、この変容には驚く。この日の算数では、にこやかな表情で、まっすぐに手をあげて発表する。振り返りカードには「前は手をあげられなかったけど、思い切って手をあげてみた。手をあげることは『こんなに気持ちいいんだ』と思った。」と書く。



○事例７・・・自力解決での支援

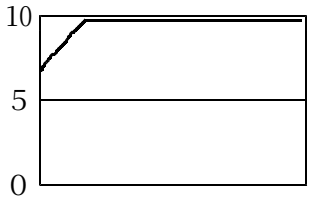
おとなしくコツコツと学習を進めている。本時は、作図もていねいで手早く、三角定規の角の大きさを調べられた。全問正解も自信になる。机間支援の時に、毎回、正確さやていねいさを繰り返しほめ、伝えた（評価）ことで自信になり、発表に結び付く。楽しい授業が終わったことが残念で最後に感情曲線は下がる。感情曲線の高い理由を「自分の考えを紙や定規で考えるのが楽しかったから。」と書く。



＜おとなしい児童への支援のポイント＞
・毎日継続していることを認め伝えること
・できていることを認め伝えること
・小さな伸びに着目すること

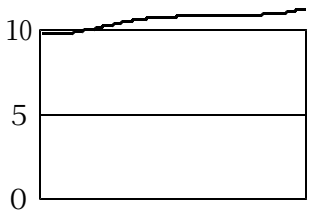
○事例８・・・自力解決での支援

三角形を作図し、どことどこが等しいかを切って重ねて確かめるときに、教師に「記号を入れていて分かりやすいね。いいことに気が付いたね。」(評価）と賞賛され、ほかの児童もまねして記号を入れる。その後、ほかの児童にも「いいことに気が付いたね。すごいね。」と言われる。授業後の感想に「先生にほめられて算数が好きになった。」と書く。



○事例９・・・振り返りカードへの記述

正四面体や正二十面体をつくる活動では手際よくつくり、教師に確認に来る。教師の「これでいいね。だいじょうぶ。早くできてすごいよ。(評価）ほかの子にも教えてね。」の言葉で、グループの児童に教えている。振り返りカードには、「正二十面体がつくれたし、みんなにも教えられた。いろんな子にありがとうと言われて気持ちがよかった。教えられてよかった。いろいろな子が声をかけたり教えてくれたりしたのですごいなあと思った。」とある。この事例のように、10点を超えて表現する児童が多数見られた。



＜友達とのかかわりでの支援のポイント＞
・友達とかかわりの場を作ること
・友達とのかかわりに注意を向けること
・友達に感謝の言葉を伝えること

4　まとめ

(1)　毎時間の振り返りカード

毎時間に行った振り返りカードの記述をまとめると表３のようになる。上記の９事例の記述と合わせて考えると、教師やほかの児童から認められることで学習意欲が向上することが分かった。また、児童は、自分の気持ちを目に見える曲線に表現し、自分の気持ちと向き合うことで、自己理解につながった。

表3　毎時間の感情曲線のまとめ

＜感情曲線の点が高い理由＞ 学習が楽しい、問題が解けた、内容が分かる、先生や友達から認められた、難しい問題や課題をやり遂げられたなど ＜感情曲線の点が低い理由＞ 問題ができない、問題が分からない、宿題や学習用具を忘れた､何の授業をやるか分からない、問題を間違った、恥ずかしい、つまらないなど ＜感情曲線が上向きに変わるポイント＞ 教師や友達からの心理的支援(安心感・賞賛・激励)、自力解決

(2)　単元終了後の振り返りカード

単元終了後に行った振り返りカードの記述をまとめると表４のようになる。主な記述内容から、算数の時間に自分のがんばりやよさを感じると共に、ほかの児童とのかかわりの中で自己有用感をもつことができたことが分かる。

表4　単元終了後の振り返りカードの記述

○自分で努力したことがうれしかった。やればできると思った。 ○（ふだん発言したことがない子が）発言したのがよかった。 ○分からないことがあったら、となりの人が教えてくれたり、忘れ物があったときも貸してくれたりしてうれしかった。 ○分からないときに教えてくれて、友達っていいものだなと思った。 ○箱づくりの時、グループの子が、「こうやってやるんだよ。」「そう！そう！」「良くできたね」などやさしい言葉をかけてくれた。 ○三角形のことがよく分かるようになった。算数が好きじゃなかったけど、やっていくうちに算数ができるようになってうれしかった。

(3)　アンケートの結果から

本単元の授業前後に、「Ｑ－Ｕ」を実施した。Ｑ－Ｕの「学級満足度尺度　いごこちのよいクラスにするためのアンケート」の結果は図５のとおりである。学級満足度尺度では、クラスに居場所があるか(縦軸：承認尺度）いじめなどの侵害行為を受けていないか（横軸：被侵害尺度）を知ることができる。

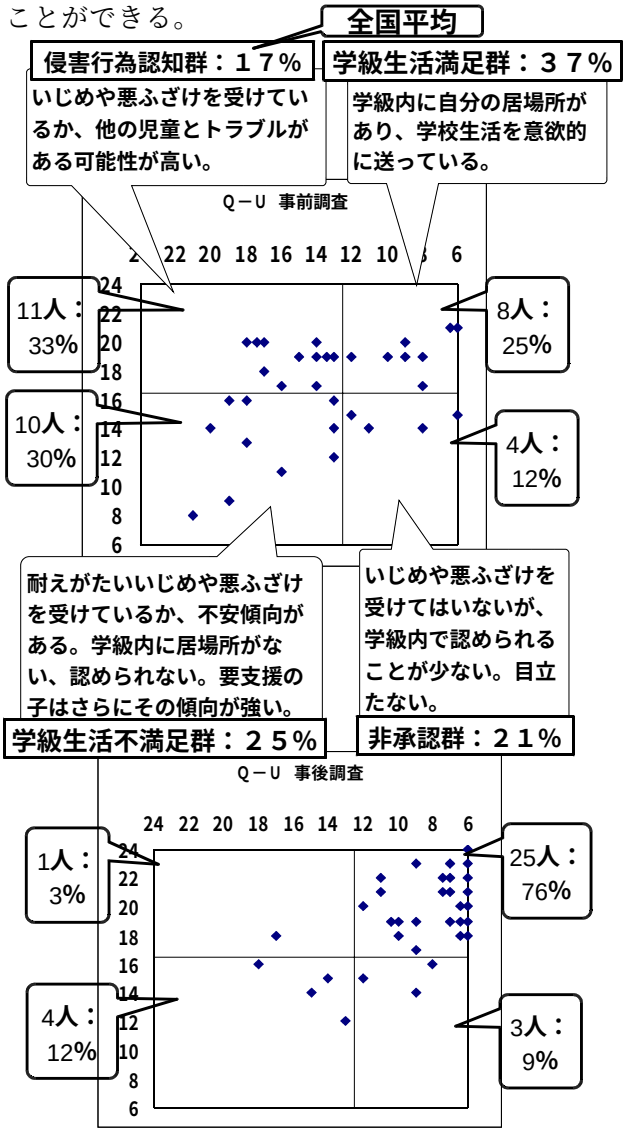


図4　「Ｑ－Ｕ」　事前、事後の人数の変化
注：『たのしい学校生活を送るためのアンケート「Ｑ－Ｕ」実施･解釈ハンドブック』より

「Ｑ－Ｕ」では、学校生活に満足している児童が増えたことが分かる。ほとんどの児童が、右上に変化している。要支援の児童はいなくなった。

算数科意識調査では、事前よりも上がった項目は、「算数の時間に、友達と一緒に考えたり、作業したりするのが好きです」が学級平均で0.5ポイント、「どういうふうに考えたか、図や言葉でかくのが好きです」が0.4ポイント、「算数の時間は楽しいです」が0.3ポイント上がった。

(4)　担任の変容

事前の「Ｑ－Ｕ」の結果が悪かったことで、問題意識をもつ。担任は、研究者からの個々の児童について質問に答える中で、実態を理解していない児童やかかわりの少ない児童の存在に気付いた。また、児童の行動について、違う見方もある

ことに気付いた。そして、本単元の第３時終了後ごろから、数人の児童の表情が明るくなる、言葉づかいが優しくなるなどの変化に気付き「ほめ認めること」の有効性を感じて、児童への接し方を変えるきっかけとなる。

(5)　児童の変容

児童の中には、担任のかかわりが比較的少ない児童もいることに今回気付いた。その中でこの児童は、学習の場面で投げやりな態度が見られた。しかし、本単元指導中、分からないことを自分から担任に質問するようになる。また、今までは嫌なことをされると、乱暴な言葉づかいで言い返していたが、この日は普通の言い方で、自分の嫌な気持ちを伝えることができ、トラブルには至らなかった。この児童は、教師からの言葉かけが増えたことで自分が認められたと感じるようになったと思われる。このことが、学習へのやる気や人に対する優しい言葉かけにつながったのではないだろうかと考える。

Ⅳ　実践からの提案

自己肯定感を高め、信頼関係をつくるための提案は以下のとおりである。

授業中に肯定的な支援を取り入れて「いいところ探し名人」になろう

「いいところ探し」とは、長所だけを見つめ、短所を否定するのではない。短所も認めた上で、長所やよさやがんばりを見付けて伝えることである。

1　児童生徒のよさやがんばりを観察する

肯定的な支援を行うためには、児童生徒をよく観察することから始まる。日常の観察や客観的なテストなども活用できる。同学年や前年度の担任などの教師や養護教諭などからも積極的に情報を集めておくことも大事である。

(1)　準備段階

○教科への興味・関心(算数科意識調査)
○教科の理解度(単元前に行うレディネステスト)
○［Q－U」

(2)　授業中

授業中は、児童の様子を観察する貴重な時間である。言語によるものだけでなく、非言語（身振り、表情、声の大きさ・調子など）も大切である。前時との比較やふだんとの違いを見付けると言葉かけがしやすくなる。

例えば､授業開始時に全員と目を合わせてから、授業を開始する方法もある。

2　見付けたよさやがんばりを伝える

(1)　伝える言葉を増やす

よさやがんばりを伝えるには、場面場面でいろいろな言葉を使い分けできるとよい。

本研究では、あらかじめいつでも使えるように、言葉の頭文字を取り「やさいジュースをありがとう」(表５)と覚えやすい「合い言葉」として教室に掲示した。

この言葉の後に、具体的なほめ言葉をつなげて伝えられるとよいと思う。

授業中は、この掲示を見ながら支援したり、振り返りカードの記述の時にも使えるように言葉かけをしたりした。

表5　合い言葉

「やさいジュースを　ありがとう」	
や	やったね
さ	さすが、最高だね
い	いいね
じゅ	じょうずだね
う	うまいね
す	すごいね
	すばらしいね
を	おめでとう
あり	ありがとう
が	がんばったね
と	とびっきりの笑顔で言われると
う	うれしいね

(2)　伝える場面を工夫する

みんなの前で伝える方が効果的だろうか？後で伝えた方がいいだろうか？低学年の児童は、大きな声でみんなの前で言った方が効果がある。小学校高学年や中学生になると、学級の雰囲気にもよるが、みんなの前でほめることを嫌がったり、妬みの原因になったりすることもある。どの場面で伝えると効果があるか考えることが大事である。

(3)　伝え方を工夫する

非言語(アイコンタクト・身振り・サインなど)でも十分伝わる。低学年では、頭をなでるなどのスキンシップも効果がある。振り返りカードへの一言も授業中に支援が足りないと感じる場合には有効な手段として活用できる。

3　授業中の児童生徒の気持ちを考えてみる

教科に自信がある、自信がない、おとなしいなど児童生徒の一人一人に合わせて伝える内容を変えてみる。（表６）自信がある場合には、「楽しい・分かる・できる・認められた・役に立った」

などの気持ちを受け止め、それを強化・伸長する支援をする。自信がない場合には「つまらない・できない・分からない・恥ずかしい・嫌だ・ばかにされそう」など不安の気持ちを解消するための支援をし、安心感がもてる支援をする。

机間支援の時は、一人一人と一対一でかかわりのもてる有意義な時間である。丸付けをしながらちょっと一声かけるなどの工夫もある。

表6　タイプ別の支援の例（資料編参照）

苦手な児童･自信のない児童への支援

＜理解していること、困っていることの確認＞
＜既習事項の確認＞＜解法の支援＞
・「分からないことは何？」
・「やることは何？」
・「分かっていることは何？」
・「ここまでは合ってるよ。」
・「ここがおかしいよ。（指摘後）ヒントを出す。」
・「落ち着いて、もう一度計算をやってごらん。」
・「辺の長さをもう一度確かめてみるといいね。」

教えるだけでなく
共に考える

＜できていることを賞賛＞
・「ここは、よくできているよ。がんばったね。」
・「前より○○ができるようになったね。」
・「できないわけはないよ。やってみよう。」
・「あともう少しだね。」
・「あきらめずにできたね。」

具体的に

＜活躍できる場をつくる＞
・合っているところを予告して指名する。
・正解を確認したところを指名する。
＜誤答したとき＞
・「つまずいたことで、前より分かるようになったね。」
・「間違いはだれでもあるよ。でも、次はできるように今のうちにやり直しておこうね。」

4　振り返りカードを活用する

振り返りカードはよさやがんばりを伝える手段としても大いに利用できる。

振り返りカードの記述から、授業理解状況を確認するほか、授業中に把握できなかった個々の感情を知ることができる。肯定的なコメントをして返すことだけでなく、児童生徒とチャンス相談の話題としても利用し、児童生徒理解や信頼関係づくりに役立てることもできる。

Ⅴ　研究の成果と課題

1　成果

今回の研究では、授業中に教師からよさやがんばりを認められることにより、児童個々の自己肯定感が高まったという成果が出た。そして、そのことが、発表などの学習意欲の向上やほかの児童への優しい言葉かけをする行動の変容にも結びついた。その結果、教師と児童や児童相互の信頼関係がつくられたのではないかと思う。今回、特に変容が見られたのが、算数の中位群やおとなしい児童である。原因として中位群は、人数も多く、いつもまじめに授業を受け自力である程度問題解決ができるので、支援や認められることの機会が少なかったのではないかと考える。そのため、今回肯定的な支援が行われたことにより変容が著しかったのではないかと思われる。

一方、教え合いやお互いの作品のよさを伝え合う交流活動では、自分は役立っているという自己有用感をもち、さらに他者理解がすすめられたと考える。その結果、学級の中に信頼関係ができたと考える。

また、単元テストでは、関心・意欲・態度や作図などの表現・処理能力の向上が見られた。

2　課題

個々の児童に合った肯定的な支援をしていくと、教科としての本時のねらいを達成するのには時間が不足しがちになる。ねらいを明確にし、指導内容を精選していくことが大事である。

肯定的な支援を、算数の授業に限らず、学校教育活動全体で、いつでもどこでもだれに対してもできるようにしたいものである。児童生徒だけでなく、保護者や職場の人間関係でも使える。始めは、意識してできることから実践し、次第に自然にできるようになることが望ましいと考える。

Webキーワード
【生徒指導　信頼関係　授業改善　算数　支援　学級経営】

＜主な参考文献＞
・河村　茂雄　著　『たのしい学校生活を送るためのアンケート「Q－U」実施・解釈ハンドブック』　図書文化社（平成11年）
・山口　豊一・石隈　利紀　著　『学校心理学が変える新しい生徒指導』　学事出版(2005)
・諸富　祥彦　著　『やる気を引き出す　できる教師の言葉の魔法』　教育開発研究所（2006）
・桜井　茂男　著　『学習意欲の心理学　自ら学ぶ子どもを育てる』　誠信書房(1997)
・戸田　昭直　著　『相手がわかるように教える技術』　中経出版（2004）

（担当指導主事　田村　克美）